

総合保育技術Ⅲ、Ⅳの振り返り

ーテキストマイニングによる分析を用いて

Reflections on Comprehensive Childcare Technology Ⅲ, Ⅳ - Using Text Mining Analysis

野田 章子^{※1} 藤澤 明日菜^{※2} 石多 加代子^{※3}
Fumiko NODA Asuna FUJISAWA Kayoko ISHITA

要旨：

本研究は、令和4年度総合保育技術Ⅲ、Ⅳの授業の振り返りをおこない、その成果と課題を明らかにすることを目的としている。考察の結果、ダンス、吹奏楽、オペレッタで、その特性を生かした学びが展開されていたことが明らかになり、コミュニケーション能力と自己肯定感の向上が本授業の成果としてあげられた。

キーワード：テキストマイニング, K H Coder, 総合保育技術Ⅲ、Ⅳの振り返り

Abstract：

The purpose of this study was to review the 2022 Integrated Technology for Childcare Ⅲ, Ⅳ class and clarify the results and issues. The research method was text mining using “KH Coder” to analyze the students' impressions after the first and second semester classes. As a result, it became clear that the students were able to learn by making the most of their characteristics in dance, brass band, and operetta, and that the improvement of communication skills and self-esteem were the outcomes of the classes.

Keywords：Text Mining, K H Coder, Reflections on Comprehensive Childcare Technology Ⅲ, Ⅳ

はじめに

本研究の目的は令和4年度の総合保育技術Ⅲ、Ⅳ¹⁾の成果と課題を明らかにすることである。研究方法は、フリーソフトウェア「KH Coder」²⁾によるテキストマイニングを用いて、受講生の前期、後期の授業後の感想³⁾の分析をおこなった。以下、ダンス、吹奏楽、オペレッタ⁴⁾の振り返りについて報告する。

1. ダンスの振り返り

1.1 方法

「KH Coder」を用いたテキストマイニングによって抽出した言葉の出現頻度から分析をする。具体的には、レポートの文字数を考慮して、前期は出現頻

度が10回以上の語 (Table1)、後期は出現頻度20回以上の語 (Table2)を抽出し、上位抽出語を中心にした共起ネットワーク図 (Fig.1、Fig2)を作成し、共起関係の分析に「媒介中心性」を採用した。分析対象は、前期の振り返りレポート250字 (受講生30名中29名提出)、後期の振り返りレポート500字 (受講生30名中30名提出)である。なお分析の対象としたレポートの誤字脱字、表記ゆれに関しては事前に分析者が修正をおこなった。

※1 長崎短期大学保育学科非常勤講師

※2 長崎短期大学保育学科非常勤講師

※3 長崎短期大学保育学科非常勤講師

Table1 前期の頻出語 (ダンス)

抽出語	出現回数
ダンス	78
思う	59
練習	37
授業	32
覚える	31
踊る	31
グループ	30
人	30
頑張る	27
活動	24
教える	24
踊れる	23
後期	22
出来る	22
前期	21
楽しい	19
実習	16
友達	16
時間	13
振り	13
難しい	13
見る	12
分かる	12
最初	11
一緒	10
協力	10
少し	10

Table2 後期の頻出語 (ダンス)

抽出語	出現回数
ダンス	189
思う	95
踊る	81
練習	70
グループ	58
子ども	58
楽しい	57
出来る	48
自分	38
見る	37
覚える	32
最初	31
難しい	31
教える	30
人	30
考える	29
笑顔	28
先生	27
踊れる	26
良い	26
感じる	25
頑張る	24
友達	24
嬉しい	23
振り	22
時間	21
保育	21
一緒	20
最後	20
不安	20

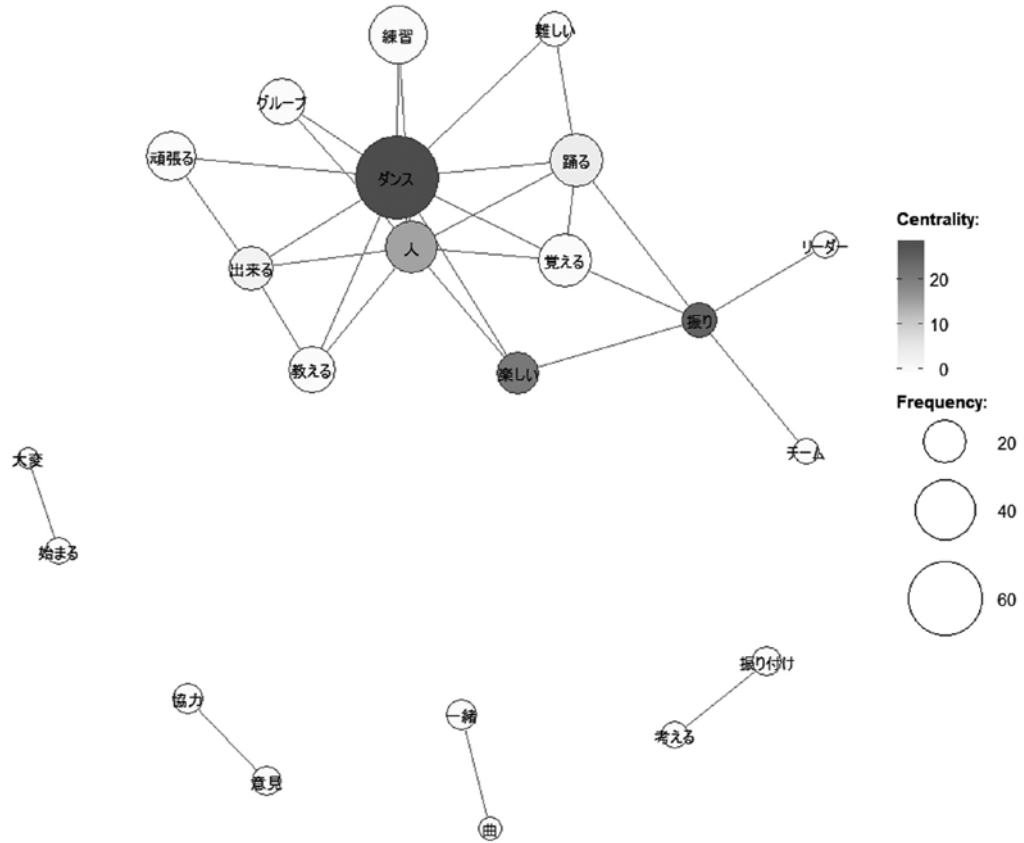


Fig1. 前期の共起ネットワーク図における中心性（ダンス）

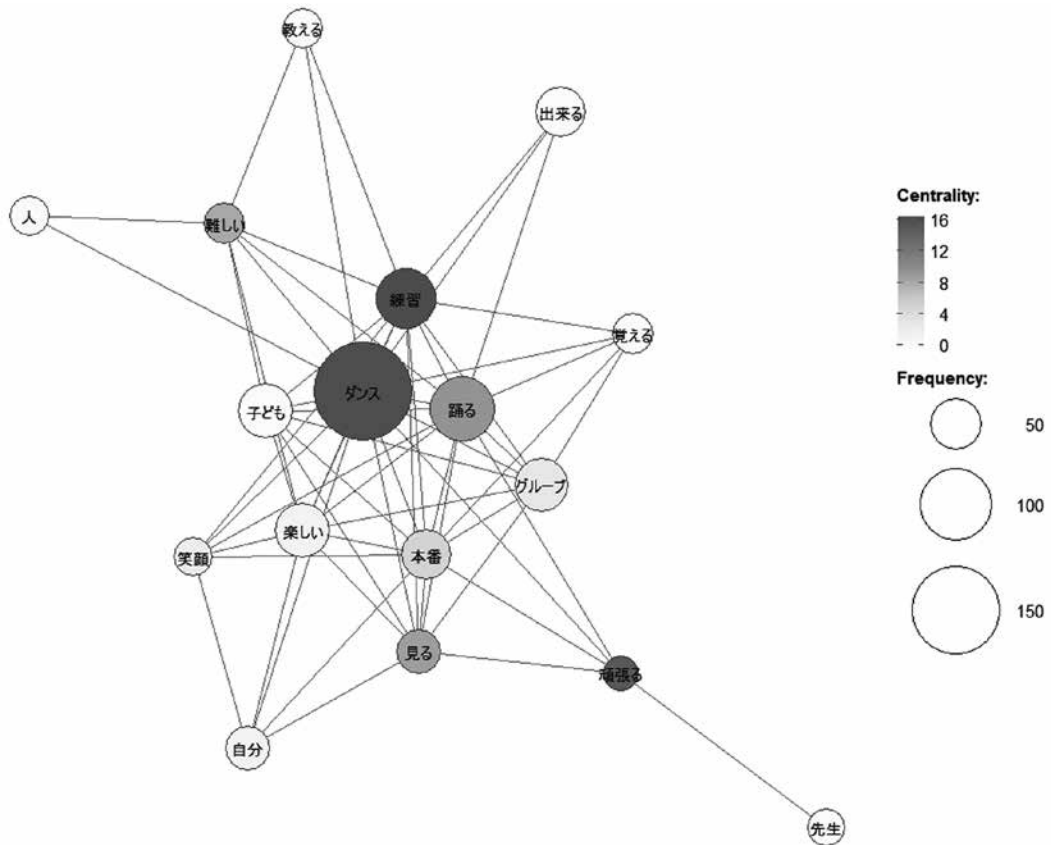


Fig2 後期の共起ネットワーク図における中心性（ダンス）

1.2 結果と考察

1.2.1 前期

まず前期の活動の振り返りをおこなう。前期の上位抽出語は、“活動に関する語”として「ダンス」「練習」「振り」「覚える」「踊る」「頑張る」「教える」「見る」、 “人との関わりを示す語”として「グループ」「人」「友達」「一緒」「協力」、 “活動の感想を表わす語”として「踊れる」「出来る」「楽しい」「難しい」「分かる」に分類できる。このような上位抽出語の分類から前期では、学生がダンスの振りを覚えるために頑張っていて練習をしていたことが読み取れ、またそのようなダンスの活動を通して人との関わりがあったこと、またその成果についてはさまざまな感想を抱えていることが分かる。

さらに、このような語がどのように結びついているかを前期の共起ネットワーク図 (fig.1) 用いて分析する。前期共起ネットワーク図では「ダンス」を中心にして、語のつながりが広がっているが、「ダンス」に最も近いのが「人」である。つまり前期の学生の「ダンス」の活動には「人」が大きく関わっていることが分かる。また注目したい点は、「楽しい」と「人」が最も近くに位置し、強く結びついている点であり、人と関わった「ダンス」の活動が楽しかったことが読み取れる。また、図中にある「リーダー」や「チーム」も「人」に関連した語彙である。このような上位抽出語の結びつきから、前期の「ダンス」の活動の特徴は「人」と深く結びついていた点であるとまとめられる。

〈前期の記述〉(抜粋)

- ・ 出来ない、分からない振り付けは分かる人や出来る人に聞き、何度も踊って覚えました。
- ・ 分からないところを周りの友達に気軽に教えてもらうことができ、すぐに教えてくれる環境がとても心地よく安心できます。
- ・ 友達に聞いて一緒に練習してもらい、逆に自分が出来るところは苦手な友達に教えて、教え合いと学び合いが出来ていたと思います。
- ・ 私の周りにはダンスが得意な友達がたくさんいて、その友達に空いた時間や休み時間を利用して教えてもらいました。
- ・ グループ活動ではグループのみんなでダンスや衣装などの意見を出したりまとめたりして、リーダーだけが頑張るのではなくみんなで協力することで、

さらに意欲が高まりました。

(下線は上位抽出語)

1.2.2 後期

次に後期の活動の振り返りを同様にしておこなう。後期の上位抽出語は、“活動に関する語”として「ダンス」「本番」「踊る」「練習」「見る」「覚える」「教える」「考える」「感じる」「頑張る」、 “人との関わりを示す語”として「子ども」「グループ」「自分」「人」「先生」「友達」「一緒」、 “活動の感想を表わす語”として「出来る」「難しい」「笑顔」「踊れる」「良い」「嬉しい」「不安」が分類できる。また、「本番」「感じる」「子ども」「自分」「先生」「笑顔」「良い」「嬉しい」「不安」は前期には出現していなかった語である。このことから後期では、学生が本番を経験し、前期以上に人との関係を広げ、前期よりも肯定的な感情を多く記述していることが分かる。

さらに、このような語がどのように結びついているかを後期の共起ネットワーク図 (fig.2) 用いて分析する。後期共起ネットワーク図では「ダンス」「練習」「頑張る」がネットワークの中心になっている。また、「ダンス」を取り巻く語のひとつひとつが、前期よりも複雑に結びついている。これは、多くの学生が同じ言葉を頻繁に使用しながら自分の思いを書き出していることに起因していると考えられ、後期の活動においては学生が共通した思いを抱いていたと読み取れる。また「ダンス」「本番」「楽しい」が近くに位置し、さらにそれらの語に「自分」と「笑顔」が結びついている点から、多くの学生が本番の自分を肯定的に受けとめていることが分かる。以上のような上位抽出語の結びつきから、後期の「ダンス」の活動の特徴は「頑張った」「本番」にあり、それは「笑顔」「自分」「楽しい」から肯定的な経験であったとまとめられる。

〈後期の記述〉(抜粋)

- ・ 本番もみんな練習通りできていたと思うし、とても楽しそうに踊れている自分がいて頑張ったなど自分でも思いました。
- ・ 曲を決めるのも、衣装を決めるのも、構成や照明など全て自分たちで作り上げることができてすごく青春だったし、思い出に残りました。
- ・ 本番、子どもが楽しそうに一緒に踊っている様子を見ると私達も笑顔で大きく踊れたと思います。子

どもがいるのといないのでは気持ちが違うなと思いました。

・踊るのはすごく苦手で少し苦戦したところも多かったけど、練習をするたびに上手くなれて本番みんなで踊った後は、達成感で溢れていました。

・ずっとダンスは苦手だと思っていたけれど、無事に踊りきることができたと、もう1回したいなと思えるくらい本当に楽しく終えることができました。
(下線は上位抽出語)

1.3 まとめ

これまでの分析と考察から、前期の授業では、学生がダンスの練習を通して人との関わりを深め、後期の授業では本番を通して自己肯定感を高めていたことが明らかになった。

2021年の本授業の振り返りでは、ダンスの「大変さ」や「難しさ」が学生の意欲を消失させ、学びの姿勢を消極的にする要因であることが明らかになり、今後の課題には苦手な学生への技術的なサポートと円滑なグループ活動の支援があげられた(藤澤・野田・石多 2021: 111)。このダンスの「大変さ」や「難しさ」の要因のひとつには、毎年多くの学生が難しいと感じるレベルのダンスを前期の授業で学習し、つどいのフィナーレに踊っている点があげられる。このようなフィナーレのダンスを前期に取り組みさせる意図は、ダンスの身体的な技術の習得や向上だけではなく、ダンスに関する基礎的な用語や知識を学ぶ機会、ダンスの振りの覚え方や教え方を学ぶなどの機会になるため、今後のグループでの創作活動の模範になると考えているためである。しかし一昨年の課題を受けて昨年からは、ダンスの苦手な学生への技術的なサポートとして、以下の2点を実施している。1つ目は正規授業後に教師も参加する自主練習の時間を設定し、授業だけではダンスを習得できなかった学生が残って学べるようにした点である。2つ目は、学生に前期の評価期間に、フィナーレのダンスを踊っている自分の動画を録画して提出させるようにした点である。授業後の自主練習は参加人数が少ないので教師の個別指導が可能になり、苦手な学生をサポートしやすくなった。また、動画提出を課したことで前期の間に必ずフィナーレのダンスを習得しなければならなくなり、後期まで分からないままにしておく学生がいなくなった。こ

のように比較的時間の余裕のある前期の間に集中して練習をし、フィナーレを踊れるようになることが、その後の学生の不安を取り除いていると感じた。また、自主練習では学生同士が互いに教え合う場面も多くみられた。以上のような取り組みが「人」と協力して「大変さ」や「難しさ」を克服する機会となり、最終的には「楽しさ」に到達できたと考えられる。さらに、互いに教えあったことで学生同士の距離が縮まり、その後のグループ活動がスムーズに行っていたように感じた。

後期は、前期と比較すると自分自身の達成感や満足感からの「楽しさ」が際立っていた。不安や緊張を乗り越えて、「本番」で「笑顔」になれたことが大きかったのであろう。そこには、「本番」という「難しさ」がやはり存在している。学生が「本番」を乗り越えられたのは「頑張った」という自信であり、また会場の「子ども」の存在であったと感じる。学生の感想からは、「子ども」を前にした時に発表する喜びを感じていることが読み取れる。一昨年は、無観客の本番で会場に子どもがいなかったため、発表の喜びを感じることも「難しさ」のひとつであったことを考えると、会場の「子ども」の存在は大きい。

このような本年度の振り返りから、学びにおける「難しさ」の重要性と、それを乗り越えさせるための手立ての必要性が指摘できる。今後は、学生が前期の段階から「子ども」の存在を意識して活動できることを課題とし、そのための手立てを考えていきたい。

2. 吹奏楽の振り返り

2.1 方法

「KH Coder」を用いたテキストマイニングによって抽出した言葉の出現頻度から分析をする。具体的には、レポートの文字数を考慮して、前期は出現頻度が5回以上の語(Table3)、後期は出現頻度10回以上の語(Table4)を抽出し、上位抽出語を中心に共起ネットワーク図(Fig.3、Fig.4)を作成し、共起関係の分析に「媒介中心性」を採用した。分析対象は、前期の振り返りレポート250字(提出者20名中20名)、後期の振り返りレポート500字(提出者20名中20名)である。なお分析の対象としたレポートの誤字脱字、表記ゆれに関しては事前に分析者が修正をおこなった。

Table3 前期の頻出語 (吹奏楽)

抽出語	出現回数
出来る	35
練習	35
吹奏楽	24
頑張る	18
演奏	16
経験	12
人	11
教える	10
時間	10
難しい	10
自分	7
沢山	7
不安	7
友達	7
楽しい	6
持つ	6
授業	6
担当	6
関わる	5
出す	5

Table4 後期の頻出語 (吹奏楽)

抽出語	出現回数
出来る	112
練習	54
吹奏楽	45
子ども	43
演奏	42
本番	36
経験	31
楽しい	30
自分	29
人	23
一緒	16
見る	16
合奏	15
分かる	15
指揮	14
難しい	14
良い	14
楽しむ	13
先生	13
リズム	12

総合保育技術Ⅲ、Ⅳの振り返り —テキストマイニングによる分析を用いて

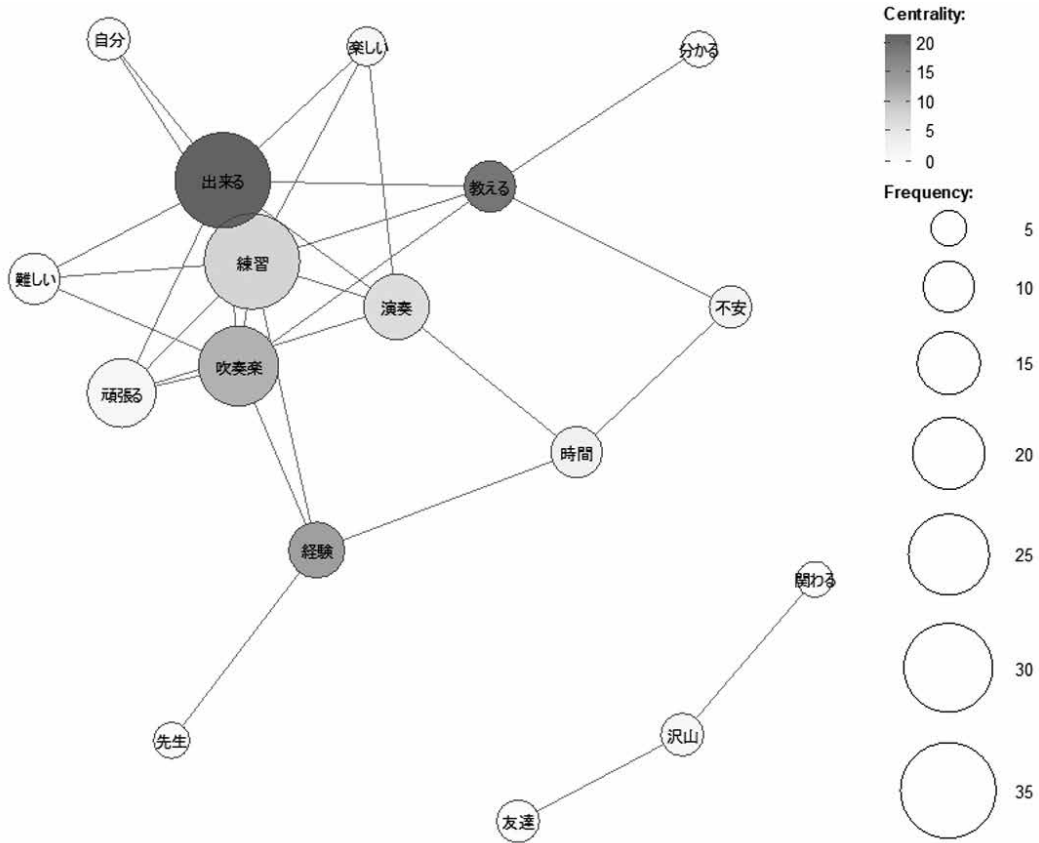


Fig.3 前期の共起ネットワーク図における中心性（吹奏楽）

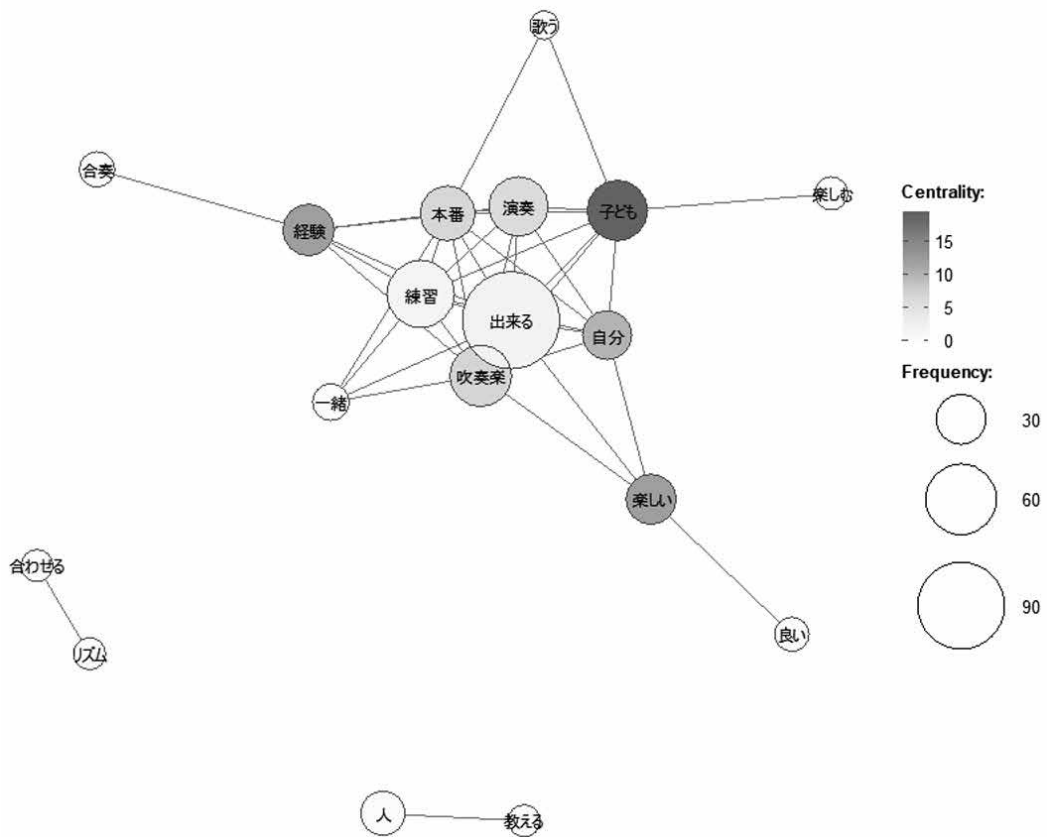


Fig.4 後期の共起ネットワーク図における中心性（吹奏楽）

2.2 結果と考察

2.2.1 前期

まず前期の活動の振り返りをおこなう。前期の上位抽出語は、“活動に関する語”として「練習」「吹奏楽」「頑張る」「演奏」「教える」、 “人との関わりを示す語”として「人」「友達」「関わる」、 “活動の感想を表わす語”として「出来る」「難しい」「不安」「楽しい」に分類できる。このような上位抽出語の分類から前期では、ほとんどの学生が初めての吹奏楽経験に難しさや不安を感じてはいるものの担当楽器を頑張って練習していたことが読み取れ、またそのような吹奏楽の活動を通して友達と関わっていたことが分かる。

さらに、このような語がどのように結びついているかを前期の共起ネットワーク図 (fig.3) を用いて分析する。前期の共起ネットワーク図では「出来る」を中心にして、語のつながりが広がっているが、「出来る」に最も近いのが「練習」である。つまり前期の学生の吹奏楽の活動には「練習」が大きく関わっていることが分かる。また注目したい点は、「難しい」と「楽しい」が「出来る」と「練習」のおおよそ同じ距離に位置し、「吹奏楽」の活動は難しさを感じているものの、練習を重ね出来るようになってくると楽しさを感じていたことである。また、「教える」も「練習」と「出来る」と結びつき、「不安」なところは「教えて」もらいながら「練習」をし、結果「分かる」や「出来る」に結びついていた。このような上位抽出語の結びつきから、前期の「吹奏楽」の活動の特徴は「練習」と関わっていた点であるとまとめられる。

〈前期の記述〉(抜粋)

・吹奏楽をするのは初めてで最初は楽器が吹けるのか不安でいっぱいだったけど、みんな優しく教えてくれたので楽しくすることが出来ました。後期も同じ楽器の友達に教えて貰いながら練習を沢山してつどいまでに出来るように頑張りたいと思いました。

・前期の授業では、綺麗でしっかりとした音を出せるように練習していました。また、前期の後半では少しメロディを演奏出来たので良かったです。リズムなども難しかったのでもっと練習しようと思います。

・今まで関わったことの無い人と沢山関わることが出来、一緒に楽器を練習するうちに楽器の使い方を

知ることが出来たし友達を作ることが出来ました。後期はつどいもあるので頑張ってみんなと合わせられるように楽器の練習をしたいと思います。

・楽譜を見て音符を読み取ることが苦手なので、吹奏楽経験者の人にたくさん手伝ってもらいました。友達と一緒に練習することで、楽しく学ぶことが出来ました。後期も頑張ります。

・初めは私に演奏出来るのかとても不安でした。でも、先生に教えていただいて今はやっと4分の1をスムーズに吹くことが出来ています。何度も練習をしてコツを掴むととても楽しくなりました。

(下線は上位抽出語)

2.2.2 後期

次に後期の活動の振り返りを同様にしておこなう。後期の上位抽出語は、“活動に関する語”として「練習」「吹奏楽」「演奏」「本番」「見る」「合奏」、 “人との関わりを示す語”として「子ども」「人」「一緒」、 “活動の感想を表わす語”として「出来る」「楽しい」「分かる」「難しい」「良い」が分類できる。また、「子ども」「本番」「良い」「一緒」は前期には出現していなかった語である。このことから後期では、学生が本番を経験したことで、実践的な子どもとの関係を広げ、前期よりも肯定的な感情を多く記述していることが分かる。

さらに、このような語がどのように結びついているかを後期の共起ネットワーク図 (fig.4) を用いて分析する。後期の共起ネットワーク図では「子ども」がネットワークの中心になっている。また、「吹奏楽」を取り巻く語が、前期と比較すると「楽しい」「良い」の肯定的な語彙に結びついている。また「吹奏楽」「子ども」「自分」「楽しい」が近くに位置し、さらにこれらの語に「出来る」が大きく結びついている点から、多くの学生が本番を経験して自信を得ていたことが分かる。以上のような上位抽出語の結びつきから、後期の「吹奏楽」の活動の特徴は「子ども」「本番」にあり、それは「楽しい」経験であったとまとめられる。

〈後期の記述〉(抜粋)

・楽器紹介の時は子どもたちも楽しそうにドラえもんだ！と反応をしてくれて私たちの演奏と一緒に歌ってくれてとても嬉しかったです。子どもたちが楽しんでくれたことが1番のやりがいでした！ほんと

に良かったです。

・全員の気持ちをひとつにして臨むことが大切でそのような成功させたいという気持ちで臨むことが出来、子どもたちも楽しんでくれたので吹奏楽が出来て良かったなど改めて感じました。

・練習では、不安だったことも子どもたちがいて、一緒に楽しんでくれる様子を見ながら演奏出来たので良かったです。

・今までの練習を生かして楽しく演奏することが出来たなと思いました。また、子どもたちも興味深そうに集中して笑顔で観ていたので楽しんでくれたのかなと思いました。この経験を活かし、たくさんの子どもたちに楽器と触れ合う経験や楽しく音楽に親しんでもらえるような保育も行ってみたいなと思いました。

・本番まで緊張していたけど、いざ子どもの前に立つと楽しくて、歌ってくれたり、横に揺れて楽しんでいる様子も見られたため演奏して良かったと思いました。吹けるようになってからは、吹く予定がなかったところも挑戦したりして自分にとってとても楽しかったし思い出に残りました。

(下線は上位抽出語)

2.3 まとめ

これまでの分析と考察から、前期の授業では、学生が吹奏楽で各自担当となった楽器の練習を通じて人との関わりを学び、後期の授業では本番を通して子どもとの関わり方や自分への自信を高めていたことが明らかになった。

2021年の本番は、子どもたちとのオンライン上のみでの交流に、学生が「もどかしさ」や「つまらなさ」を感じ、それに加え楽器未経験者は限られた期間で技術習得をしなければならず、それが吹奏楽に対するやる気を失う原因になっていた。そのため今後の課題には教師による学生への演出面でのサポートや楽器未経験全員に対する技術面でのサポートの必要性があげられた。このようなオンライン上での子どもとの交流に対する「もどかしさ」や「つまらなさ」は、学生がオンライン発表を正式に決定されるまで一生懸命練習をしてきたものの、実際は画面越しの子どもたちに向けての演出を考慮出来ていなかったことや練習の成果を子どもたちに目の前で見てもらえなかったという点があげられた。また、楽器未経験者

者にとっては経験者との差に落胆し、焦りや不安を増幅させていた(藤澤・野田・石多 2021:109)。本年度はこの課題を受けて、予めオンラインでも子どもたちが楽しめるコンテンツ(クイズ形式の楽器紹介やストーリー仕立ての演奏)の導入をおこなった。さらに楽器未経験者への配慮としては楽譜を演奏する上での苦手箇所を教師が個別に聞き出し、教師が学生のスキルに応じて演奏しやすい譜面に書き換えたり、省略できない重要なフレーズの場合は他の楽器の譜面に書き換えて経験者に任せたりした。その分楽器未経験者には指揮やナレーションを担当してもらうなどそれぞれが無理のない範囲で活躍できる場を設けるようにした。また授業後に技術面で不安な学生は教師や経験者がついて個別指導をしたことで、焦りや不安を抱えている学生の精神面をサポートすることが可能となった。このようにマニュアル通りではなく学生の状況に応じて臨機応変に対策をとったことが、前期の学生の練習に対する意欲を増進させ、自然と学生同士が連携をとれることに繋がった。その結果後期の本番では本授業の目的である子どもたちへ向けた内容を全員で一緒に発信することが出来、結果的に前期で感じていた「不安」や「難しさ」を克服し「楽しさ」に到達できたように思われる。

また、後期では前期で上位に抽出されなかった「子ども」の存在が、直接的に「自分」の「楽しさ」へ結びついていたことが今回の「KH Coder」で読み取れ、保育を学ぶ学生たちにとって目の前にいる「子ども」の存在がいかに大きいか再確認できる結果であった。本年度の振り返りから、学びや子どもたちへ向けた表現方法の重要性も再確認出来たが、何より焦りや不安を抱える学生にいかに自信をつけさせ、楽器経験者、未経験者に満遍なく達成感を感じさせるか、その手立ての必要性が指摘できる。今後は「練習」における「不安」や「難しさ」をより早期の段階で解決することと、「子ども」の存在を今以上に意識して学生ひとりひとりが活躍出来るステージ構成を考えることを課題としたい。

3. オペレッタの振り返り

3.1 方法

「KH Coder」を用いたテキストマイニングによって抽出した言葉の出現頻度から分析する。具体的に

は、レポートの文字数を考慮して、前期は出現頻度が5回以上の語（Table5）、後期は出現頻度10回以上の語（Table6）を抽出し、上位抽出語を中心にした共起ネットワーク図（Fig.5、Fig.6）を作成し、共起関係の分析に「媒介中心性」を採用した。分析対象は、前期の振り返りレポート250字（提出者21名中20名）、後期の振り返りのレポート500字（21名中16名）である。なお分析の対象としたレポートの誤字脱字、表記ゆれに関しては事前に分析者が修正をおこなった。

Table5 前期の頻出語（オペレッタ）

抽出語	出現回数
オペレッタ	26
歌う	25
練習	23
楽しい	21
歌	17
頑張る	17
後期	14
授業	14
自分	13
前期	11
覚える	10
感じる	9
役	9
パート	8
音程	8
本番	8
友達	8
ダンス	7
楽しむ	7

Table6 後期頻出語（オペレッタ）

抽出語	出現回数
オペレッタ	39
練習	37
頑張る	32
自分	30
歌	27
本番	27
人	21
友達	21
歌う	19
楽しい	17
感じる	17
出来る	17
見る	16
良い	16
衣装	12
音	12
考える	12
先生	12
意見	11
経験	11
子ども	11
覚える	10
最初	10
作る	10
時間	10

3.2 結果と考察

3.2.1 前期

まず前期の振り返りを行う。前期の上位抽出語は、「活動に関する語」「オペレッタ」「歌う」「練習」「授業」「頑張る」「覚える」、「人との関りを示す語」「友達」「自分」、「活動の感想を表す語」「楽しい」に分類できる。このような上位抽出語の分類から、前期は授業で歌うこと、覚えることを頑張った、友達と一緒に練習が楽しかったことが読み取れる。

また、このような語がどのように結びついているかを前期の共起ネットワークから分析する。前期のオペレッタでは、歌うことを中心にして図が広がっているが当にその通りで、授業では10曲の歌を歌えるよう、音取り練習から始めた。それを頑張って練習したことで、歌えるようになり、オペレッタの活動や歌が楽しくなっていった様子が伺える。

また、否定助動詞の「ない」の語が気になって改めて前期の振り返りを読み直してみたが、「音程やリズムがわからなかったが」、「知らない歌だったが」、「知らなかった人とも友達になれ」、という肯定的な文章であった。

〈前期の記述〉抜粋

- ・オペレッタの経験が有ったから選択した。
- ・歌を歌うことが大好きでオペレッタを選びましたが、オペレッタには歌う力だけでなくその役になりきる事、人前に出ることを恥ずかしがらない力も必要だということを学ぶことができました。
- ・オペレッタはやってみると思ったより難しいものでしたが、達成感が得られると思うので、あと少し練習を頑張りたいと思います。
- ・最初は意見の食い違いが多く、やっていけるのかなと思っていましたが、役が決まり練習が進んでゆくと、すごく楽しくこのメンバーで良かったと思いました。
- ・オペレッタの歌は覚えるくらい家で練習しました。歌が良くなっていくのが楽しかった。
- ・パート練習をしてその後2声でハモったときは、とても楽しく感じられました。
- ・仲間で揉めあうことも多々ありましたが、揉めあいもより良いオペレッタを作ることに繋がると思います。

3.2.2 後期

次に後期の振り返りを同様にして行う。後期の抽出語は「活動に関する語」「オペレッタ」「練習」「頑張る」「本番」「歌う」「見る」「考える」「作る」、「人との関わりを持つ語」「自分」「人」「友達」「仲間」「全員」「子供」「先生」、「活動の感想を表す語」「楽しい」「良い」に分類できる。

後期の抽出語では「本番」の語が多く占めている。「見る」という語も現れ本番で誰かに見られることを意識しての活動を行っているのが分かる。また人との関わりを持つ語が増え、活動面の語では「考える」「作る」という語が新たに出てきている。これは、歌を懸命に覚えた前期に比べ、制作や振り付け、自分の役の表現を本番に向かって考えながら活動したことを示している。

次にこのような語がどのように結びついているか後期共起ネットワーク図を用いて分析する。やはり一番中心にはオペレッタを「頑張る」があり、それには自分ではない「人」や「友達」が大きくかかわっているのが分かる。また自分も歌の練習を頑張って良いオペレッタにしたいと考えている。さらにオペレッタを見てもらうという意識も生まれている。

〈後期の記述〉(抜粋)

- ・オペレッタを通して仲間を信じる事、お互いの良いところを認め補い合う事を学びました。
- ・大変なことや、仲間同士のおつかり合いなどがあって、悩んだ時期もありましたが、本番が近づくにつれひとりひとりの意識が高まり、私自身も見に来て下さる方々に満足してもらえるような作品にしたいと変わって行きました。
- ・コーカスレースでは、皆で何回もやり直ししたらより良いものになるかを考えた。
- ・立ち稽古では、配置関係や、どう動いたら主役が目立つのか試行錯誤しながら全員で考えたのが、楽しかった。
- ・しかしリハーサルの時舞台上でやってみると気持ちがどんどん変わりやる気が溢れて来ました。本番前の練習では皆が頑張っている姿を見て、自分も頑張ろうと思いました。
- ・本番では皆全力を出し切ったし、子供たちも見入っていたので、良かったと思います
- ・私が一番こだわったのは、歌や踊りは勿論ですが、

背景の絵の製作です。

・オペレッタを通して、仲間と助け合いながら歌やダンスの振り付け、衣装作りなどを行い全員で一つの物を完成させるという達成感を味わう事ができました。(下線は上位抽出語)

3.3 まとめ

これまでの分析と考察から、前期は歌を歌うことが楽しかったとの振り返りが多くあり、自分のスキル向上に向かって活動していたように思える。

そして後期はオペレッタを友達と練習し本番に向かって頑張ったことが伺える。後期では、友達の頑張りに触発され、本番での観客の目を意識した活動へと変わってきていることが分かった。

今年は、あえてリーダーを作らなかった。それは本番が近づくとリーダーの負担が増え、一人で背負い過ぎて潰れてゆくケースを避けたかったからである。そのような中、自主的に皆の意見をまとめようとする学生が現れ各グループで引っ張ってくれた。

パート練習ではソプラノの音取りを学生たちに任せましたが、それぞれ助け合いながら練習できていたようである。オペレッタを第2希望にしていた学生のほとんどが第1希望のダンスに移動し、歌の好きな子の比率が多くなった多め、難しい曲も楽しく乗り越えることが出来たと思う。

後期はやはり本番に向かってみんなで協力したり、仲間の頑張りに刺激を受け、お互いの力を認め合いながら助け合っていたことが伺われる。後期はグループに分かれて製作活動に入ったのだが、オペレッタを第2希望にしている、ダンスに移動しなかった学生3名は積極的に製作を担ってくれた。製作は例年よりスムーズに期限内に出来たが、その演技や歌がおろそかになり、本番直前まで練習を重ねた。最後の追い込みは大変だったが、頑張っただけで乗り切ることができた。学生は仲が良くコミュニケーション等は問題なかったが、反対に仲が良すぎていいにくい発言ができなかったこと、練習へのスイッチの切り替えができなかったことは反省点である。

また昨年と同じくラインを使って音取り用の音源を流したにも関わらず、最後まであやふやな学生がいたのは何か手を打たなければならないと思った。マスクをつけての活動の1年であったため、本番でマウスシールドになった時口の開きかがこんなに小

さかったのかと驚いた。来年度はマスク無しの授業に切り替え、もっと大きな口で明るい表情で歌えることを目指したい。

最後に本年度の成果として、活動を通して他の人を認め協力して行くことによって、良い作品ができると多くの学生が気づいたことがあげられる。

総括

令和4年度の総合保育技術Ⅲ、Ⅳの振り返りは、アンケートではなく、自由記述のレポートをテキストマイニングで分析する方法を用いた。その理由は、学生が本授業で何を学ぶのかを学生の言葉から明らかにし、「つどい」という大きな舞台を経験することにどんな意味があるのかを知りたいと考えたからである。分析の結果、ダンス、吹奏楽、オペレッタともに前期から「練習」を「頑張る」学生の姿勢が読み取れた。2021年の振り返りで、前期からやる気を引き出すことがダンス、吹奏楽、オペレッタともに今後の課題になっていたのも、その点では3部門とも改善していたと考えられる。また、前期は「踊る」「演奏」「歌う」が中心になっていることから、もうひとつの課題であった技術的な向上に関しても進展しているといえよう。後期は、3部門ともに舞台経験を通して感じた「楽しさ」が共起ネットワーク図の中心になっていた。この「楽しさ」は、共起ネットワーク図の言葉のつながりをみると、友達や先生と共同して創りあげた達成感であり、子どもに披露できた喜びであり、出来なかったことが出来るようになった自分自身に対する満足感であった。以上のことから学生のコミュニケーション能力と自己肯定感の向上が本授業の成果としてあげられた。

注)

1) 令和4年度の総合保育技術Ⅲ、Ⅳの授業は、「第38回幼児のための『音楽と動きのつどい』」でのダンス、吹奏楽、オペレッタの発表を目的とした授業である。本催しについては、藤澤、野田、石多(2021)参照。

2) KH Coderは、テキストデータを計量的に分析するために、作成・公開されたフリーソフトであり、多変量解析を用いてテキストデータを要約、提示し、コーディング規則を作成し、テキストの関係性を探索的に分析することができる。本研究では、共起関

係の分析に「媒介中心性」を採用した。この分析方法では、頻出語ほど大きな円で描かれ、ネットワークにおける中心性が高い語ほど、色が濃く示される。また共起関係にある語は線で結ばれ、太い線ほど強い共起関係を意味している。詳細は、樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版を参照。

3) 「前期の授業の感想を250字程度で自由に記述しなさい」、「後期の授業の感想を500字程度で自由に記述しなさい」という課題を出し、Google クラウドに提出させた。

4) 本研究では、ダンスは野田、吹奏楽は藤澤、オペレッタは石多が執筆を担当し、指導者の立場から成果と課題を明らかにした。

[参考(引用)文献]

- 1) 樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版
- 2) 鳥丸佐知子(2019)「保育士養成関連授業は学生の何を変えたのかー『理想の保育者』を目指してー」京都文教短期大学研究紀要 第57号 23-31頁
- 3) 藤澤明日菜、野田章子、石多加代子(2021)「総合保育技術の実践的研究 - コロナ禍の学びを通して - 」長崎短期大学紀要第33号 107-116頁